Challenge
チャレンジ

保温保冷工事会社が
製造業に本格参入

浅井康雄代表
取締役社長

保温・保冷工事を手掛けるナイガイ（墨田区）が、製造業の領域に本格参入している。2023年５月には野田工場で保温帯（断熱材）加工のロボット化に成功し、量産体制を構築。浅井康雄代表取締役社長は、「新たな事業の柱を確立するための挑戦だ。現在の事業ともシナジーが十分に見込め、当社の強みである製品開発力を生かせる。ナイガイだからこそ開発できるような断熱材商品を提供していきたい」と展望を語る。

＝ ナイガイ ＝

野田工場はダクト専用ではなく、パネルや消音器も製造していたため、手狭なところもあり、工場の増設をもくろんでいた。19年末に断熱材を開発、製造、加工をしているＡＴ技研（岐阜県）から事業譲渡され、グラスウールボードを巻き付けやすい形状（保温帯）に加工・製造する事業を新たに開始した。

浅井社長は、「保温帯を製造している会社は国内に10社ほどしかない。事業の規模感から手作業で行っている企業が多く、汎用（はんよう）品の機械はなかった。そこで独自の機器の製作をメーカーに依頼し、国内で初めて保温帯製造のロボット化を実現した。カーボンニュートラル、エネルギーコスト高騰からの断熱ニーズに応える新たな取り組み」と強調する。

この結果、１巻（６㍍）の製造時間を12分から４分に短縮、生産効率が２倍以上になった。６人で行っていた作業を３人に省力化し、人件費は57％削減する見込み。

24年度からは時間外労働の上限規制も始まった。このような背景から、建設業界では、現場の負担軽減・省人化に向けてさまざまな業種で、「プレハブ化」が進んでいる。

浅井社長は、「保温業界でもプレハブ化に対応した製品を増やさないと深刻な人手不足に対応できなくなる」と危機感を示す。その対策として「加工品種を増やしていくとともに、カスタマイズ製品のニーズにも対応し、断熱材商品の開発を強化する。現在は保温材メーカーへの供給となるが、将来的にはダクト施工工事業者への製品販売も視野に入れている」と意気込む。

ロボット導入後

ダクトのプレハブ工法